天文學

第240號（第 21 巻）　（昭和16年）　6 月 號

卷頭　隨筆

宇宙を觀る，人生を觀る

山　本　一　清

〔暦時制と天文學〕

天文學と一般社會との一大接觸面は暦や時に關する方面である．むかしから，如何なる國に於いても，人間生活のプログラムを時間的に規定する必要上，暦を作り，又，晝夜を分割して，時刻を定める．こうした暦や時の基本になるものは天體の運行であり，從つて，之れに大きい寄與をなすものは天文學である．

西洋の天文學は，最初，やはり，暦や時制を定める必要によつて起つたが，其の後は，暦學よりも，むしろ，航海術のために天文學は大きい貢献をする方に其の主力が轉向した．と言つても，別に，決して，天文學者が其の第一の使命たる暦學を忘れたわけではないのだが，實はエジプトから學んだ太陽暦が非常に立派なもので，其れ以上に改良したり，研究したりする必要が起らなかつたところへ以つて來て，一方，アラビヤ人たちが，宗教上の必要から，又，各國各民族の間の交通や，移住や，中世に於ける海外發展等の目的から，天文學が其の進路を著しく變へたのであつた．それでも，しかし，キリスト教の分布と共に，復活祭日その他，宗教的な祭日の決定には，やはり，太陽暦ではなしに，月の運行を考慮に置く必要があつたため，この事だけは，いつまでも，天文學者の上に課せられた問題であつた．

之れに反して，東洋の天文學は，日本でも，支那でも，インドでも，純粹な太陽暦を作らず，いつまでも月の運行に依存する陰陽暦を作るに止まつたため，その複雜な理論と計算法の研究のために，前後數千年を費して，尙ほ成功の域に達せず，從つて，天文學者は，暦學以外に一歩も出る餘裕を有たなかつた有樣であつて，航海術や，宇宙學のためには，アマチュアが多少の貢献をしたに止まつた．卽ち，東洋に於いては，暦學が天文學の全部であつたのである．

今，こゝに本誌は六月號を迎へて，恒例により，之れを暦又び時制の特輯號とするに當り，暦と天文學との關係を考へ，殊に此れが東洋と西洋とで大變な

違ひになつてゐることを思ひつゝ筆を運ぶ.

今日，東亞の新秩序建設に當り，天文學の立場から曆時制を見るとき，多少の問題が吾人の眼前に横はつてゐることに氣がつく．一は時制の問題であり，他は改曆の談義である.

1日を24時間に等分してゐる制度の改正は,之れも有閑人が，議論のために議論をする段になれば,いくらでもタネはある．例へば,世にメートル制の行はれる時代であるから，時間も，何とかして“十進法”に變へて了つたら如何か？といふ問題など．しかし，今日の“六十進法”による時間制は，一方に於いて1圓周360°の角度との關係が非常に密接なのであるから，この角度も“十進法”か，何か，新しいものに變へて了はない限り，時間のみを“十進法”に改めることは，不可能であつて，强いて其れを行へば，それは，改善でなくて，改惡となる恐れがある.

現在の24時間制を，“午前”“午後”に區別しないで，始めから終りまで，ブツ通しの24時制にすることは，今日のやうな革新期には，一日も早く實行すべきである．今，全世界を見るに，午前午後の稱呼を頑强に固執してゐる主な國は，英米ブロツクと我が日本だけである．ヨーロツパ大陸の諸國や,ソ聯,滿洲國などは早くから“午前”“午後”無しの24時制を實行してゐるのであつて,此の新制度の利益は今更喋々するを要しない明白事である.既に我國に於いても，學界，軍部の大部分では之れを實行して，便利を得つゝあるのであるから，一般社會が早く之れに習ふことは望ましい.

英米人などは非常に保守的に，頑强であつて，實に笑ふべき滑稽を時々演じてゐる．例へば，英米人は，決して，“0時何分”と言はないで，必ず午前（又は午後）12時何分と呼ぶ習慣であるから，會話中にも，文章體に於いても，全く判別に苦しめられることがある．卽ち，“汽車が明日午前12時15分に發車する”といふ場合に,之れは一體,晝の12時のことなのか？，夜中の12時のことなのか？，いくら考へても，考へれば考へるほど判らなくなる．讀者よ，一寸，考へて見給へ，“午前12時”と言ふのは，“午前11時”よりも1時間あとであるから，正に之れは正午12時のことであると考へるべきであらう．しかし，又，考へるに，“午前”といふものは12時間しか無いのであるから,强いて“午前12時15分”と言へば，之れは，夜中の12時を過ぎて，“午前”になつてからの“15分”である——卽ち之れは夜中過ぎの時刻であるとも言へる．果して，どちらが本統であるか？（事實英米人たちは，かゝる場合は夜中の時刻を意味することゝ解釋してゐる.）若し之れを“0時”から“24時”まで，ブツ通しで言ひ表はせば，些の混亂もないのである.

“時計の文字盤が24時まで刻まれてないから,今直ぐ24制の採用には困難であ

る”と言ふ人がある．之れも一理であるが，しかし，社會が一般に24時制となれば，時計を賣るための時計屋は，必ず競つて24時までの文字盤を持つ時計を考案するに違ひないのである．

一錢一毛の節約をも行はなければならない今の時節に，“日光節約”のための標準時變更を未だ實行しない我が國の政府の優柔不斷にもあきれる，“日光節約の目標”は國民の經濟生活の合理化が第一である．このことを知らない當局は愚と言はなければならない．“日光節約”を“夏期時刻法”の形に於いて最初に實行したのはドイツであり，其の後，英佛米伊西等の各國が皆之れに習ひ，遂には天津や上海にある英米人の社會に於いてさへ，之れを實行するに至つた．又，近年は，この精神を“標準時變更”の形式に於いて，シカゴ市，メキシコ國，チリ國，滿洲國，ソビエト聯邦，東亞大陸在住の日本人社會等が實行し，本年からは，英國本國も之れを實行することゝなつた．利害の問題は極めて明白である．我が國に於いても，實行が一日遲れゝば，一日の損である．

今日の革新期に，我が國の暦法を改めるべしといふ提唱が平山博士等によつて行はれてゐるらしいが，之れは又，驚くべき暴論であつて，以つての外のことである．暦にも缺點はある．缺點がある故に，20年來諸國の聯合委員會が作られて，改暦方法が研究せられてゐる．しかしながら，“改正”といふ以上，現行暦よりも惡いものになつて了つてはならない筈である．しかるに平山博士等の論によれば，年始を立春にするのであるといふ．之れでは“改惡”であつて決して“改良”ではない．そして，かりに我が日本國だけには多少の便利はあつても，他の諸外國の贊成を得ることは絶對に不可能である．この意味に於いて，平山案は我が國を孤立させるものである．およそ，世の改暦論者は，現行暦の缺點のみを擧げるに急であつて，其の美點を忘れてゐる（或は，少なくともこの美點を忘れた振りをするズルさがある．）しかしながら，現行暦の一大利益は，今日の世界の殆んど總ての國々が之を實行してゐる事實である．故に，今後，誰が改暦を提唱しようとも，其れが實行される場合には，必ず全世界の各國各民族が同時に其れを採用する可能性が無ければならぬ．此の見込みが出來るまでは，みだりに改暦を實行してはならぬ．從つて，此の如き改暦の手續きは，必ず正統な國際會議によらなければならない——こんなことは，十も百も平山博士は知つて居る筈である．知つてゐて，尙，横車を押さうとするのは暴であり，不正である．しかしながら，平山氏は，理學者の身分を以つてして，數年來國家が定めたメートル法に反對してゐられる人士であるから，上記の暴論も，此の人にしては止むを得ないものか!?　(1941—4—10)